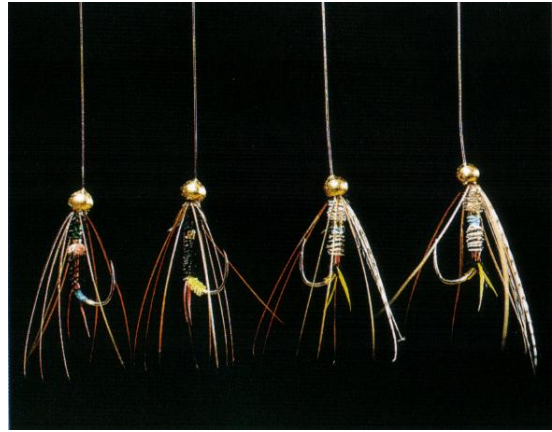


播州毛鉤

【産地組合】播州釣針協同組合

（産地紹介）

江戸時代末期に京都から技法が導入され、農家の副業として守り育てられて来ました。時代とともに製品の完成度を高めて、優れた釣りの成果を生むまでに技術が向上しました。明治中頃には水産博等に出品して数々の賞を受賞し、以後、その品質は多くの釣り師の認めるところとなりました。今日では国内の毛鉤の大部分を生産する産地として、業界の先頭に立っています。



毛鉤作りは、魚の種類と季節、天候、水深、水質等の自然環境により合ったものを作ることが大切です。これを追求して 1,000 以上の種類の毛鉤を作り上げられました。全神経を手先に集中して、水生昆虫そのままを真似て作り上げた、美しい色をあしらった幻想的な工芸品です。

毛鉤は、水生昆虫をそのまま模したイミテーションではなく、そのイメージを日本的美意識によって模式化したもので、美しい色をあしらった幻想的な工芸品です。

毛鉤づくりは機械万能の現在も昔ながらの手細工一本槍の技法によってつくり上げ、100年以上の伝統と歴史を誇っています。わずか1cm足らずの鉤に数種類の鳥の羽を絹糸で巻き、金箔、うるしなどを用い指先でつくり上げる虫に似せた生き物となります。

魚の種類と季節・天候・時刻・水深・水色・水質など自然環境に適合させることが大切で、これを追求して、先人達は不断の努力と創意工夫を重ね、種類500余種つくり上げてきたのであるが、今日でも、なお同種の鉤が愛用されている。この水生昆虫に似た毛鉤を、水中で動かしてやるとあたかも川虫が泳いでいるかのように見え、魚を欺いてしまうほど生きた虫に見える毛鉤をつくる熟練者になるまでには5年以上要し、ベテランでも1本作るには10数分もかかります。